

令和元年6月19日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370396

研究課題名(和文) 宗主国の交代と植民地 20世紀スペイン語圏カリブ地域文学における共同体意識の研究

研究課題名(英文) The Metropoli and colony: a study of Twentieth-Century's Caribbean Literature in Spanish

研究代表者

久野 量一 (Kuno, Ryoichi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：70409340

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、宗主国の交代が植民地状態にある地域や国の文化に与える影響について、スペイン語圏のカリブをフィールドとして文学面から検討を試みたものである。具体的には、キューバの場合、米国からソ連へ宗主国が交代し、その後ソ連の消失を経験する。プエルト・リコの場合には、スペインから米国へと宗主国の交代を経験している。二つの国と地域のいくつかの代表的な文学作品および文芸誌の分析を行い、宗主国の交代(と消失)の及ぼす影響を言語・文化・アイデンティティ・時間の連続性から検証した。成果は論文や学会発表、研究書の刊行を通じて公表してきた。また研究の着想のきっかけになった文学作品の翻訳紹介も行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じて、宗主国の交代は植民地の様々な局面に影響を及ぼすことが確認できた。それまでに存在した土着の、そして小規模の文化にとって歴史的にも無関係の巨大な文化が流入することは、その土地の言語面において大きな混乱を呼び起こす。また、そのような支配文化の交代により、植民地文化は主体性や従属性、また植民地人のアイデンティティ面で複雑化を余儀なくされる。このことは植民地から宗主国への物理的な移動を引き起こす可能性もある。またキューバの場合には冷戦の終結によって宗主国が消失している。研究課題である「宗主国の交代」は非対称関係にある文化の衝突を分析する際に有効な概念であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the influence that the change of suzerains has on the culture of colonized regions and countries from a literary point of view, using the Spanish-speaking Caribbean as the research field. Specifically, the suzerain in Cuba changed from the United States to the Soviet Union, with the Soviet Union dissolving thereafter. In the case of Puerto Rico, the suzerain changed from Spain to the United States. By analyzing several representative literary works and magazines, the effect of the change of the suzerain country (and its disappearance) was examined from the viewpoint of continuity of language, culture, identity and time. The results have been presented through the publication of papers, academic conference presentations and research books. The translation of literary works that inspired the concept of this research was also presented.

研究分野：文学

キーワード：キューバ プエルト・リコ カリブ 宗主国 植民地

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) スペイン語圏の文学の場合、スペイン語で書かれているという共通点から、これまでのところ「アメリカ大陸」と「カリブ海域」を区別した研究が特別に意味を持ったことがなかった。研究代表者もまた、大陸部とカリブ海域の文学にあえて線引きをした研究をしてこなかった。なにより両地域ともに、スペイン語という共通点のみならず、「植民地経験を有する地域」という大きな共通点があったからである。

しかし、アメリカの「大陸部」と「カリブ海地域」には、歴史的な経緯に大きな差異があり、両地域の文学を同じ観点からでは把握しきれない現象が生成していると考えられることがわかってきた。それはカリブ海地域に起きた「宗主国の交代」である。

ひとたびこの「宗主国の交代」という観点から考えてみたとき、この現象が頻繁に起こった場合、それは、当該の植民地地域における「過去」から「現在」、そして「未来」への流れといった時間的な観点からは連続性を阻みかねない因子となりうることは容易に想像ができる。また同様に、マイノリティ集団（小さな国や文化）にとって「宗主国の交代」は、言語、文化、社会の分断を引き起こす決定的な因子となる。なにより植民地の成員は、日頃より自分たちが生きている文化の主体性や従属性をめぐって日常的に過大な負荷を負わされているのだ。このようなケースは世界各地で散見されており、検討に値するべき課題であるように思われた。

(2) 本研究は、上記の問題をスペイン語圏カリブ、具体的にはキューバとプエルト・リコに絞って検討しようという試みである。キューバの場合にはスペインから（一時的に米国を経て）ソ連、さらにはソ連の撤退という道を辿り、プエルト・リコの場合には、スペインから米国へと、宗主国はそれぞれ異なるが、「交代」を経験している。このような両島の文化において、帰属意識やナショナリズムを主に文学作品から分析することで、宗主国の交代がどのような意味を持っているのかを検討しようというものである。

### 2. 研究の目的

(1) これまでの研究を概観する限りでは、カリブ海地域のスペイン語圏の文化について、「宗主国の交代」に焦点をおいて検討された形跡が見られない。とりわけキューバとプエルト・リコの文学をそのような観点から比較検討した成果を見つけることができていない。

(2) このことに鑑み、新たな視角でこの地域の文学に光をあてるべく、「宗主国の交代」によって引き起こされた植民地の共同体意識の変容を、文学作品を通じて考察することを目的としている。「宗主国の交代」が、20世紀を通じてそれまで相似的な関係にあった両島の植民地の文化にどのような影響を及ぼしたのかの検討を通じ、植民地人にとっての土着文化、古い支配文化、新しい支配文化の相関関係を探り、植民地人の共同体意識の変容を考える。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究は「宗主国の交代」について、文学テキストを読むこと（テキスト研究）と文芸誌を通史的に概観すること（雑誌研究）の二つの角度から接近した。

(2) キューバの場合には、アメリカ合衆国からソ連へ、またソ連の撤退という宗主国交代と宗主国消失について、エドムンド・デスノエス、ヘスス・ディアス、アナ・リディア・ベガ・セローバ、アントニオ・ホセ・ポンテなどの作品を中心に読み進め、分析したものについては論文を執筆した。またプエルト・リコの場合にはスペインから米国への宗主国の交代について、マヌエル・ラモス・オテロ、ロサリオ・フェレなどの作品を分析した。またエドガルド・ロドリゲス・フリアのテキストを読み進めた。

(3) 雑誌研究はキューバに絞り、①文芸誌『アバンセ』(1927-1930)、②1937-58に刊行された文芸誌（『ベルブム』、『エスプエラ・デ・プラタ』、『ナディエ・パレシア』、『オーヘネス』、『シクロン』、『ガセタ・デル・カリベ』）③文芸誌『カサ・デ・ラス・アメリカス』(1960-2018)、④『プレザンス・アフリケーヌ』(1947-2016)、⑤文化紙「ルーネス」(1960-1962)、⑥『批判的思考』(1967-1971) ⑦『三大陸』(1967-)、⑧『カリブ年報』、⑨『ウニオン』、⑩『ガセタ・デ・クーバ』を通史的に概観し、網羅的に検討、分析した。

(4) ただし、キューバの雑誌研究では、上記すべての雑誌のバックナンバーを収集しており（もちろんすべてのバックナンバーを入手することは叶わなかったが）さらにデジタル化の進展とともに分析するコーパスが増大し、このことは逆に資料の取捨選択をする必要が生じ、結果的にはすべての雑誌を取り上げての研究は不可能になった。

(5) プエルト・リコの雑誌研究は、デジタル化もされておらず、現地調査もまた物理的に不可能であったため、断念せざるを得なかった。

### 4. 研究成果

(1) 「宗主国の交代」という観点を文学作品から検討することのそもそもの意義については、研究計画の段階では前提としていたが、検討した結果、まずはこの現象が文学作品を分析する因子として有効であることが確かめられた。とりわけキューバにおいては、宗主国の「交代」のみならず、(ソ連の)「消失」という経験が文学を通じて様々な描かれ方をしていることが確認できた。またプエルト・リコの場合でも宗主国の交代が引き起こした「プエルト・リコのナショナリズム」の様態についていくつかの角度から分析することができた。以下、個別の問題群を挙げながら説明する。

(2)キューバにとっての宗主国とは、米西戦争前後から引きずっている問題である。そのため米西戦争後、米国に実際に統治され、その後米国の傀儡政権によって支配された時代も考慮する必要が出てきた。1898年の米西戦争から1959年のキューバ革命後の東側ブロックへの参入までを一区切りとすれば、キューバにおける、米国の言語である「英語」の位置付けが鍵となる。その点は論文「キューバ作家の英語創作と翻訳」で論じた通り、英語はキューバでは身近な言語から敵性言語となっており、英語に触れること自体の機会も減少する。むしろ英語や英語能力は特に異質な言語(能力)として捉えられる(エドムンド・デスノエスの場合など)。その代わりに、アナ・リディア・ベガ・セローバの場合にみられるように、ソ連への留学経験を持つものも増え、ソ連から多くの技術者がキューバへやってくることになり、ロシア語が身近な言語となる。

(3)言語については、言語との距離感のみならず、キューバの場合でも、プエルト・リコの場合でも、言語選択と翻訳の問題、特に作家自らによるいわゆる「自己翻訳」の問題を引き寄せることになる。プエルト・リコのロサリオ・フェレはスペイン語で書いたテキストを英語に翻訳する際に、オリジナルのテキストにかなり大量の情報を付加している。この情報はオリジナルのテキストと比較すると、米国での受容を意識してのものとも解釈できるが、その米国が宗主国であることを考えれば、またテキストそのものがプエルト・リコと米国の非対称的な関係を扱っているものであることも考慮すれば、簡単には片付けられない問題となってくる。植民地状況がオリジナル・テキストと自己翻訳テキストの差を生み出したと言える。キューバ作家の英語への自己翻訳については、作者の移動(場合によっては亡命)、さらにはオリジナル・テキストを英語で執筆する新しいケースを呼び寄せる。こうした英語のテキストをめぐるのは、キューバ国民文学として読むべきかどうかという国民文学論争を引き起こしている(ロベルト・G・フェルナンデス、クリスティーナ・ガルシアなど)。また別の場合では、英語執筆は英語の「普遍性」を意識したものと解釈でき、それは特定のナショナルな文脈を超越した空間での読解を目指した、いわゆる「世界文学」的なテキストを誕生せしめている(カブレラ=インファンテ)。

(4)宗主国の文化が暴力的に(つまり現地のコンセンサスを経ずに)打ち立てられることによって、土着の文化はポジ(陽画)からネガ(陰画)へと反転していく可能性がある。このことはプエルト・リコのケースに顕著に見られる。映画では『ウェスト・サイド物語』に見られるように、土着の文化を所与のものとする植民地人は、そのことがむしろハンディとなり、アイデンティティ・クライシスを引き起こす(マヌエル・ラモス・オテロ)。また植民地状況における「文学史」の編成について、プエルト・リコは特別な経験を有するようと思われる。主権共同体を持たないプエルト・リコにおける「プエルト・リコ文学史」はいかなる形式を持って語られているのか。このことはすでに先行研究でも指摘されていることでもあるが、プエルト・リコの文学は多くの場合、その内容に、正典構築に挫折するストーリーを含んでいる。カリブ海において同じように植民地状況にある地域との関係を深めようとしても、宗主国の交代による文化の大きな変化は、プエルト・リコにおける文化をより一層複雑化してしまっている。

(5)キューバの場合、米国からソ連へ宗主国が交代したことは、文化面においても思わぬ副産物を生むことになった。それは米国公民権運動との深い関わりであり、またアジアやアフリカにおける独立運動との緊密な結びつきである。この両者との関係は、部分的には東側ブロックへの参入によって生まれたものではあるが、公民権運動やアフリカとの関係ではキューバにおけるアフロ性の目覚めとも関わり、多くの文化運動、文学作品に結びつくことになった。これらの分析はまだ途上だが、今後の研究によってさらに発展する課題であることは確かめられた。

(6)宗主国の「消失」は1989年の冷戦終結によってキューバにもたらされたニュースであるが、このことはキューバの未来を過去との連続性のもとに捉えることを不可能にした。どのような未来を志向するのかの問いが、「これからキューバはどうなるのか」という場合によっては、植民地状況を前提としてしまっている。このことはプエルト・リコにも言えることだが、植民地状況が長く続くことは、未来を思い描くことの困難さにつながることである。このことがむしろ過去への執着を呼び込み、「昔はよかった」といった、ノスタルジー現象が蔓延する。プエルト・リコでは1898年以前のスペイン統治時代への回帰運動まで起きている。

(7)以上のような研究成果を学会での口頭発表や論文で公刊したほか、研究最終年度には、それまでの論文をまとめ、著書『島の「重さ」をめぐる一キューバの文学を読む』を刊行した。この本をめぐるのは合評会を開催し、肯定的なものから批判的なものまで多くの反応をもらった。書評も書かれ、研究成果の社会への還元もある程度は果たしたものと考えている。またこの研究を通じて多くの研究者と意見交換を行った。

(8)また、本研究を進めるにあたって着想の元となった文学作品の翻訳も行なった。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 5 件)

久野量一、「キューバ作家の英語創作と翻訳」、『立命館言語文化研究』 査読有、29(4)、pp.19-28、2018年3月

久野量一、「反マッコンド文学—21世紀キューバにおける第三世界文学とダビー・トスカ—」『天啓を受けた勇者たち』、『総合文化研究』、(20)、pp.48-57、2017年3月

久野量一、「ポストソ連時代のキューバ文学を読む—キューバはソ連をどう描いたか?」

『れにくさ』、(6)、pp.129-139、2016年3月  
久野量一、「プエルト・リコ、問い直される「正史」——ロサリオ・フェレとマヌエル・ラモス・オテロの作品から——」、『立命館言語文化研究』査読有、27(2・3)、pp. 177-187 2016年2月  
久野量一、「『低開発の記憶』にみる植民地知識人の戦略——カリブ文学論その1」、『総合文化研究』、(18)、pp. 54-65、2015年3月

〔学会発表〕(計 1 件)

久野量一、「文学におけるキューバ革命の有効性」、『日本ラテンアメリカ学会』2017年6月3日

〔図書〕(計 6 件)

(翻訳)カルラ・スアレス、『ハバナ零年』、久野量一訳、共和国、2019年2月、全277頁。  
久野量一、『島の「重さ」をめぐって——キューバの文学を読む』、松籟社 2018年5月、全253頁。  
久野量一、他、『カリブ海世界を知るための70章』、明石書店 2017年6月、全352頁(190-193)  
久野量一、他、『東欧の想像力』、松籟社、2016年1月、全318頁(304-309)  
(翻訳)ファン・ガブリエル・バスケス『コスタグアナ秘史』、久野量一訳、水声社、2016年1月、全322頁  
久野量一、他、『全体と部分』、弘学社、2015年3月、全187頁(91-100)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者  
なし

(2)研究協力者  
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。